

就寝形態と家族関係

— 家族の就寝形態調査 (Ⅲ) より —

○ 篠田有子 (日本女子大学)

○ 飯長喜一郎 (お茶の水女子大学)

大久保孝治 (早稲田大学)

中野由美子 (家庭教育研究所)

はじめに

日本の家族における人間関係は、就寝形態からみる限り、Caudill, W (1966) や森岡清美 (1973) らの先行的調査が示すごとく、夫婦関係より、親子一体感を重視する傾向がある。そこで、このような同室寝 (コ・スリーピング) 文化のもとでの就寝形態の研究は、「誰が誰とどのような位置で寝るか」まで言及する必要がある、同室に寝る者同士の空間的位置を明確にし、またそれらの位置の変遷をも追う調査を実施した。

我々は、1984年より3回の調査を行っており、今回の発表は主として3回目の調査の報告である。第1回目の調査については、翌年本学会第37回大会にて、「家族の就寝形態の研究—時系列的变化の分析—」として報告している。

第2回目の調査は、対象となる家族をこれまでの3歳前後から小学校5年生以上の長子のいる家族へと広げた。これによって、親子同室寝から親子分室寝 (きょうだい寝・独立寝) にいたる自立へのメカニズムを就寝形態との関連で考察した。

第3回目の調査のテーマは2つである

- i) 日本に家族の就寝形態の実態に迫るために、サンプル数を増やし、これまでの調査結果の検証をする。
- ii) 就寝形態と家族の間のわれわれの仮説の検証をしていく。

調査の前提となる仮説は、次のごとくである。「家族の就寝形態は、家族関係を反映している。すなわち、就寝時の家族間の空間的距離は、お互いの心理的距離に対応するのではないか。」

1. 就寝形態の時系列的变化

1) 前2回の調査から

表1は、われわれの第1回、第2回の就寝形態の時系列的变化の結果、3人家族にみられる主要な五つの就寝形態について、その構造とその構造のもつ動きの特徴とを示したものである。すべての家族の就寝形態は、家族関係を構成する二者関係 (ダイアッド) に着目すると、同室隣接 (コード1)、同室分離 (コード2)、別室分離 (コード3) の三種のいずれかの空間的距離の組み合わせで表現できる。定着性は、家族システムの発達にともなう動態分析の結果である。平均出現率は三人家族の全数について、二歳時点 (113ケース) 三歳時点 (70ケース) の平均を出している。

2) 第3回調査について

①調査地：横浜市戸塚区、日立市

②調査時：1989年5月～7月

③調査対象：家庭教育研究所及び家庭教育センターに通う三歳前後の長子をもつ世帯の父母、(213ケース)

④調査の方法：これまでの面接法からアンケート法にすることによって、対象者数を大

表1) 就寝形態の類型別特徴 (F 父親(夫)、M 母親(妻)、C 子)

就寝形態	図 解	空 間 位 置 (静態的特徴)	定 着 性 (動態的特徴)	平均出現率 %
C分離型		夫婦は同室隣接寝 (コード1) 母子は同室だが分離 (// 2) 父子も同室だが分離 (// 2)	長子成長に対して低く 次子誕生に対しても低い	9
M中央型		夫婦は同室隣接寝 (コード1) 母子も同室隣接寝 (// 1) 父子は同室だが分離 (// 2)	長子成長に対して高く 次子誕生に対して低い	37
C中央型		夫婦は同室だが分離 (コード2) 母子は同室隣接寝 (// 1) 父子も同室隣接寝 (// 1)	長子成長に対して高く 次子誕生に対しても高い	28
F独立型		夫婦は別室分離 (コード3) 母子は同室隣接寝 (// 1) 父子は別室分離 (// 3)	長子成長に対して高く 次子誕生に対しても高い	18
C独立型		夫婦は同室隣接寝 (コード1) 母子は別室分離 (// 3) 父子も別室分離 (// 3)	長子成長に対して高く 次子誕生に対しても高い	6

幅に増やすことができたが、これは全2回の調査からの知見をもとに、家族の寝方をあらかじめ19種のタイプに図示し、生後すぐから3歳までの寝方の変化を、6カ月毎に番号で選んで記入してもらう方法をとったためである。またそれぞれの時点での住宅の種類、全部屋数、寝室の広さについても番号で記入してもらった。

⑤調査の内容：従来の内容に加えて、心理的距離のデータは、夫婦関係、母子関係、父子関係についての項目を設け、それぞれ父親、母親、母親から見た父親という三つの視点で評価してもらった。

3) 結果の概要

①対象の属性：子供数－平均1.8人、父親の年齢－平均34.8歳、母親の年齢－平均31.4歳、長子の年齢－平均2歳7カ月、次子の年齢－平均1歳6カ月、長子の男女比－107対106

②家屋条件：住宅の種類－各時点を通じて一番多いのが「社宅・官舎」(半数弱)、次が「一戸建持ち家」、続いて「アパート」「分譲マンション」、の順、全部屋数－平均3.6(時間の経過とともにわずかつつ増加)、寝室の広さ－平均6.3畳(時点による変動なし)

③家族システムの発達と就寝形態の変化

図1) 3人家族の就寝形態の変化

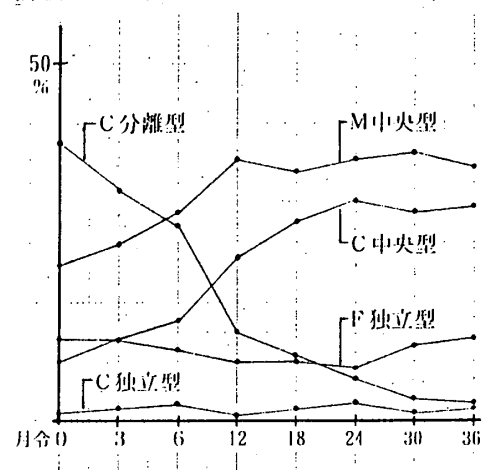


表2) 3人家族における就寝パターンの時系列的変化

	0	3	6	12	18	24	30	36
1 C分離型	47(81)	39(81)	33(69)	15(32)	11(22)	7(11)	4(4)	3(3)
2 M中央型	26(46)	30(63)	35(74)	44(92)	42(84)	44(68)	45(49)	43(37)
3 C中央型	10(18)	14(28)	17(35)	28(58)	34(68)	37(57)	35(39)	36(31)
4 F独立型	14(25)	14(28)	12(25)	10(21)	10(19)	9(14)	13(14)	14(13)
5 C独立型	1(2)	2(4)	3(6)	1(3)	2(3)	3(4)	1(1)	2(2)
6 その他	2(3)	1(3)	1(3)	1(2)	2(3)	1(2)	3(3)	2(2)
有効 総数	計	(174)	(207)	(212)	(208)	(199)	(110)	(87)

213世帯 - {(非該当)+(4人家族)}

*数字は% (カッコ内は実数)

表3) 12カ月時点と36カ月時点の就寝パターンの比較

12ヵ月	36ヵ月	C分離型	M中央型	C中央型	F独立型	C独立型	その他	計
1 C分離型		3	8	4	1	1		17
2 M中央型			24	9	1		1	35
3 C中央型			4	15	2		1	22
4 F独立型				2	8			10
5 C独立型						1		1

*数字は実数

表4) 4人家族就寝パターンの時系列的変化

	24ヵ月	30ヵ月	36ヵ月
7 F-M-C1-C2	10(5)	9(9)	5(6)
8 F-C1-M-C2	18(9)	8(8)	8(10)
9 C1-F-M-C2		4(4)	2(3)
10 F-M-C2-C1	6(3)	6(6)	7(9)
11 F-C1-M-C2	31(15)	33(32)	40(48)
12 F-C2-M-C1	4(2)	8(8)	7(8)
13 C1-F-C2-M			
小計 (同室型)	60(34)	70(67)	69(84)
14 F独立型	16(8)	17(16)	19(23)
15 C1独立型	2(1)	1(1)	1(1)
16 F-C1/M-C2	4(2)	2(2)	1(1)
17 F-M/C1-C2		3(3)	2(3)
18 その他	8(4)	7(7)	7(9)
計	(49)	(96)	(121)

*数字は% (カッコ内は実数)

表5) 次子誕生前後の時点の就寝パターンの比較

前 後	F-M-C1-C2	F-C1-M-C2	C1-F-M-C2	F-M-C2-C1	F-C1-M-C2	F-C2-M-C1	C1-F-C2-M	F独立型	C1独立型	F-C1/M-C2	F-M/C1-C2	その他
C分離型	2	2		1	1			1			1	2
M中央型	10	8	2	1	17	2		10	1			3
C中央型	3	9	1		21	3		3				3
F独立型								7	1	2		1
C独立型								1			1	1
その他					1							

注1 36カ月時点までにC2が誕生した122ケースについての集計である。

注2 データの性質上、C2誕生の直前および直後の就寝パターンの比較ではない。

注3 C2誕生前とC2誕生後の間に就寝パターン不明の時点が存在する8パターンも集計には含まれている。

注4 表中の網かけの部分は、C2誕生前後で就寝パターンの基本的構造が変化しない組み合わせである。

以上、家族システムの発達（子どもの成長と子ども数の増加）とともに変化する就寝形態の動きを分析した結果、前二回の就寝形態の出現率に比べ、ややM中央型とC中央型に集中する傾向は認められたが、定着性に関しては、これまでの結果を検証するものであった。

2. 心理的距離と就寝形態の関係

1) 心理的距離の指標項目の因子分析

因子分析（主因子解の後、バリマックス回転）の結果、母親から見た母子関係は3因子に分かれ、それぞれ「保護性」「密着性」「わずらわしさ」を意味すると考えられた。

同様に、母親から見た父子関係および父親から見た父子関係は「密着性」「わずらわしさ」の2因子、母親から見た夫婦関係および

父親から見た夫婦関係は「相互満足理解度」「わずらわしさ」の2因子からなることを確認した。なお、夫婦関係のうち「性生活は大切だと思う」は独立に分析することとした。

2) 就寝形態の類型化

各家族に優勢な就寝形態を以下の3点の基準により類型化した。

- ① 1～2才時点(12、24、30ヵ月)を重視する。
- ② 2年間以上同じ就寝形態が連続していること。
- ③ 次子誕生後は父、母、長子の3者関係のみに着目する。

その結果得られた就寝形態タイプの分布は次のごとくである。

M中央型——90サンプル

C中央型——63サンプル

F独立型——20サンプル

C独立型——7サンプル

C分離型——16サンプル

どちらともない——17サンプル

以上のタイプのうち主要なM中央型、C中央型、F独立型の3類型を分析の対象にした。

3) 心理的距離と就寝形態の関係

まず母子関係、父子関係、夫婦関係、父親の育児参加度の各指標×上記の3つの就寝形態タイプの分散分析を行った結果はいずれも有意水準に達しなかった。

ついて就寝形態ごとの母子関係、父子関係、夫婦関係の指標の平均値の差の検定を行った結果、次の諸点については有意な結果が得られた。

- ① F独立型の方がC中央型より、母親から見た父親の育児参加度が低い。(t 2.58, $p<0.05$)
- ② F独立型の方がM中央型より、母親から見た父親に対する「わずらわしさ」が高い。(t 2.12, $p<0.05$)

その他については、心理的距離と就寝形態に有意な関係が見られなかった。

4) 考察

家族の心理的距離と就寝形態との間に有意な関係が見られたのは上記2点のみであったが、これらはいずれも仮説を補強するものであった。すなわち、①の結果は、3つの就寝形態のうち、父親と子どもの物理的距離はF独立型が最も大きく、C中央型が最も小さいことと関係があり、②の結果は、父親と母親の物理的距離はF独立型が最も大きく、M中央型が最も小さいことと関係があると思われる。

統計的に有意な結果は上記2点のみであったが、その他の多くの結果が就寝形態に見る物理的距離と心理的距離の関係を推測させる方向を向いていたことは注目に値する。

また、有意な結果が母親の回答に関してのみ得られたことは、父親の回答の妥当性を疑う必要性を示唆している。父親用の質問紙を母親を通して配布回収したことの影響も見逃せない。

就寝形態は家族間の心理的関係を反映しているのではないが、というのが本研究の基本的仮説であるが、一方、家族療法では、家屋内の物理的環境を操作することによって心理的関係を操作しようとする試みが行われている。

文献

- 飯長喜一郎他 1985 家族の就寝形態の研究、家庭教育研究所紀要、第6号
- 篠田有子他 1987 家族の就寝形態の研究、そのⅡ——長子誕生からの10年間——、家庭教育研究所紀要、第9号
- 龍谿乗峰 1989 訪問家族療法Ⅱ——家屋における物理的操作とその心理的影響——、家族心理学研究、第3巻、第1号